音の杜
OTOnoMORI
会報 Vol. 8 2009 12/23 発行

『佐藤敏直の音と言葉を形に』

〜2010年からの3カ年計画 〜

大谷 恵美

今年の漢字は「新」。清水寺の森清範貫主が全身で揮毫する姿がテレビで何度も映されました。「新」という希望や喜びを連想させる漢字の印象と一緒に、背中合わせの大きな不安を噛みしめるような「新」の含みを味わいながら年の瀬を迎えています。

佐藤先生がいらしたら、この年の瀬に新政権の誕生をどう評価し、どんな言葉で揶揄するのだろう。普天間問題をどう見るだろう、オバマ大統領のノーベル賞受賞をどんな態度で受け入れるだろう、草食系男子になんと声をかけ新年への期待を言葉にするだろう･･。一年の締めくくりに、思わず空を見上げて先生と色々会話をしてみたくなるものです。新年への希望は？ 新年を迎えるにあたって日本人である私のあり方は？ いやいやそれより私個人の充実は？･･･などなどつらつら思ううち、やはり先生の言葉に触れたくなります。

1995年の年末に書かれた『あんさんぶる』誌（1996年1月号 カワイ音楽教育研究会）の編集後記で先生は、この年にノーベル平和賞が授与された「パグウォッシュ会議」と、その創設者の一人のジョセフ・ロートブラット氏のことを取り上げて、推論だと前置きしながら、この会議とロートブラット氏への平和賞の授与が、世界の冷戦構造や核廃絶運動の高まりの蔭で長くお預けになっていたのではないか？東西の緊張状態の中で権威あるノーベル賞委員会ですら、世論の利害を気にしてその意義深い活動の評価を棚上げにしておき、佐藤栄作やゴルバチョフの受賞が先になされたことは妥当だったのか？と厳しく訴えていました。

「あ〜すっきりした！」。

私が思わず感じる爽快感は、こうした言葉を静かに響く先生の声で「音」として耳にできていた自分の正直な感覚です。魂の宿った言葉の静けさと、通奏低音のような一貫した信念をストレートに言葉にされる先生の豪快さには、弱い者にも強い者にも見方に思える真実が響いていたように思えるのです。そういう率直で理屈抜きの正直な思いの吐露を言葉にしてくださる方が、今なかなかいらっしゃらなくなりました。こういう爽快な議論や会話や教えは、音として体に響き、聴いた者に力を与えます。草食系の男子でも、或は肉食系に変化する！？くらいの威力がありはしないかと思ったりします。先生の近くで、こうして音（言葉）の為せる技に育てていただけたことを、今更ながらに貴重なことであったと思う年末です。

今回会報には、先生のそうした音と言葉の爽快さを文字通り全身に浴びて共に青春を謳歌された元「どんぐりコーラス会」を代表して、柳生さん、太田さん、原口さんから、まさに宝物のようなお話をご寄稿いただきました。敏直語録にも、「どんぐりコーラス会」演奏会の貴重なプログラムへ寄せた先生の愛情たっぷりの言葉を掲載させていただくことができました。元「どんぐりコーラス会」の皆さま、ご協力をありがとうございました。

2010 年からの 3 カ年計画

音の杜は、会員の皆様方からのご支援によって佐藤敏直作品の継承への働きをするべく発足し活動して参りましたが、スタッフ各人の仕事、子育て、親の介護等々周辺状況が発足当時とは様々に変化し、運営の継続の難しさを禁じ得なくなりました。そこで、会員の皆様の貴重な支援金を少しでも研究成果の形として残すことをテーマに、**来年 2010 年より 3 カ年で活動を休止**することにいたしました。これまでのご支援とご協力を心より感謝いたします。

2010 年からの 3 カ年計画としまして、できる限り以下のことを目指して皆様からのご支援を目に見ることのできる、聴くことのできる形につくりあげたいと願っております。

現在、予算等々を検討している最中ですが、ご協力いただけるレコード会社や出版社、また編集スタッフなどを募りながら、佐藤敏直のありありと生きた音と言葉がその魂とともに後世の人々にも伝わってゆき、大人もこどももプロフェッショナルも素人も、弱きも強きも勇気を与えられるよう、作品を世の中に残す作業を行いたいと思います。先生がもっとも願っていらしたであろう世界の平和と人々の心の平和のために、敏直（びんちょく）作品が手に取れるものとして残ってゆくよう、残りの 3 年の働きに力を注ぎたいと思います。

どうぞ会員の皆様、残り 3 年間のさらなるご支援とご協力をお願いいたします。

また、以下の３カ年計画実行のためには、音の杜現スタッフのみでの対応はとても厳しい作業になることがわかっています。何らかのご協力をいただける方がいらっしゃいましたら、お手を挙げていただけますと助かります。

どうぞご協力をよろしくお願いいたします。

［３カ年計画のイメージ］・・・予算その他検討中ですので希望的予定です

1） 2010 年から 3 年間、年 1 回の演奏会開催

2） ピアノ作品の録音と CD 発売

3） 邦楽作品の録音と CD 発売

4） 敏直語録からの（色々な執筆物から）エッセイ集、または執筆集の出版

5） 雑誌対談などからの対談集の出版

※上記の計画課題は、来年早々から各関係会社等々への相談に入りますので、
発行物としての実現化のために各種許諾等のとりつけに際し、ご協力い
ただけますご部門などございましたらお知らせいただけると助かります。

『佐藤先生の思い出』

柳生 信行（元どんぐりコーラス会団員）

佐藤先生とどんぐりコーラス会は永年のお付合いが有ります。先生が22才頃からのお付合いです。そのどんぐりコーラス会は、早稲田大学のテニスを愛好していた学生達のちょっとした変身願望から生まれたようです。「コーラスでもやってみようか」というような軽い気持から1958年7月に創設されたように聞いています。

佐藤先生は、創設数ヵ月後に2人目の指導者として、どんぐりコーラス会に迎え入れられました。佐藤先生が慶応大学、対する早稲田大学の学生を中心とする同年代の面々。なにか宿命的な出会いの感じがします。指導者の佐藤先生は、バリバリの若手作曲家。一方のテニスからコーラスに転じたメンバーは、コーラスはズブの素人。口だけは達者で、寄れば議論の絶えない議論好きです。組織論や芸術論など論じ合っていたようです。

そんな中に私が入会したのは1961年のことです。佐藤先生は25才、私は7才下の18才でした。目のギョロッとした眉毛の太い印象が残っています。この年令での7才の差は大変なものです。他のメンバーはビンチョクさんと呼んでいましたが、私にとっては佐藤先生（心の中では佐藤大先輩先生くらいの気持ち）でした。

佐藤先生は1960年頃からどんぐりコーラス会のために合唱曲作品を手掛けられていました。草野心平の詩“蛙より”、山村暮鳥の詩「雲」より馬・こども・ゆふがたをもとに作曲しています。その楽譜には“素朴に”“はしゃいで”“しみじみと”などの指示がされています。その頃のどんぐりコーラス会の合唱技術の水準は、「あれ松虫が鳴いている」と歌いだす、虫の声などを歌っていたことから、その技術レベルが想像できると思います。

佐藤先生の心の葛藤は、この頃からしばらく続いたことでしょう。このようなコーラスといつまでも付合っていて良いのだろうかと。それでも佐藤先生の努力が実って、創立7年目の1965年に第1回目の演奏会を開催するまでに成長しました。その演奏会で、佐藤先生の作品の中から“花に寄せて”と“じゅもくが”という曲が演奏されました。その後、ほぼ毎年定期演奏会が開催され、その度に佐藤先生直筆の曲を合唱することができましたことは、何にも増して有難く感動的なことでありました。

しかし、どんぐりコーラスのメンバーは「この歌は、ある時期のどんぐりに佐藤氏が迎合して作った歌ではないだろうか」などと言いたいことをズケズケと言うのです。普通の作曲家なら腹を立てて、そんなことを言うのなら金輪際そんな合唱団のために作曲などするものかと言うところです。しかし、佐藤先生は、そのような発言に対しても耳を傾け、むしろそのような発言を期待しているようでもありました。

1978年、どんぐりコーラス会20周年記念定期演奏会では「佐藤敏直作品の夕べ」と題して、全曲、佐藤先生の作品で飾ることができました。そのプログラムに佐藤先生が、どんぐりコーラス会との関係を次のように綴っています。

素人合唱団の中でも最も素人くさく、20年続いたとは到底思えない拙い技術に付き合えたことも、今日の私の、ある誇りです。

その後も佐藤先生はどんぐりコーラス会と共に歩み続け38年余の足跡を残してくれました。その間に往来したどんぐりコーラス会のメンバーは200名を超えると思います。それらのメンバー一人一人の心の中に、佐藤先生の曲とその指導する姿、大らかな人柄その他諸々の思い出が一杯詰まっていることでしょう。



心友「佐藤敏直」との思い出の中のお宝

太田 勝啓（元どんぐりコーラス会団員）

「佐藤敏直との思い出」寄稿のご依頼により、46 年間の心友佐藤敏直（以後、佐藤と呼ぶ）とのお付き合いの記憶の中から、私のお宝とも言える思い出を探し出してみた。

その１　佐藤との出会い

昭和31年4月慶応義塾大学工学部（現理工学部）の入学式を終えた数日後、日吉のキャンパスでのことである。日吉駅から銀杏並木の大通りが校舎に向かって続いていた。その日に行われるオリエンテイションの会場へ通じていたその大通りの突きあたりで、いろいろな部活の名前を掲げて入部の勧誘をしている机がいくつも並んでいた。その中の一つにワグネル・ソサイアティ男声合唱の入部受付け場所があり、机を二つ並べて勧誘をしていた。

私が確か右側の机で入部申込書に記入をしていた時のことだ。新入生のくせに、油でてかてかに塗った慶応帽をかぶった背のいやに高い男が左側の机に来て、入部の申込書に記入を始めた。すると受付けをしていた先輩が、「君らは二人とも電気工学科じゃないか。」といわれたので、お互いに顔を見合わせて「俺、太田です。」、「俺、佐藤です。（低音）」と名乗り合い、挨拶を交わして会場へ向かった。これが佐藤との出会いだ。

工学部は、当時一学年目は教養課程を日吉のキャンパスで過ごし、二学年目から中央線の武蔵小金井にあった校舎に通学した。（今は日吉に統合されている。）

入部したワグネル・ソサイアティの合唱練習は三田の校舎で行われていたから、日吉での授業後に三田に行くわけで、けっこうな時間が必要だったが、若さと当時の充実感があってさしてつらいと思った記憶はない。この練習の時にピアノの伴奏をなさっていたのは忘れもしないあの「小林道夫先輩」で、本当に贅沢な練習風景だったのを覚えている。

その２　箱根・金時山へのハイキング

日吉の校舎に通学しだした春の一日、佐藤と私、それに田宮、河原田の４人で箱根の金時山に登った。往路は小田急線からバスを乗り継いでの登山で、晴天であった。山頂にあった金時茶屋におられた金時娘の小見山妙子さんと5人で一緒に写っている写真は、私の宝物である。彼女は身長が153センチほどだろうか、エプロンをしていて丸顔に三つ編みの髪をしている。この写真を彼女に見せてみたいものと今でも思い続けている。佐藤はこの写真ではタオルを首に巻いている。私は学生服を上に着ている。青春を謳歌したハイキングの時の写真だ。

その３　小金井校舎でのこと

1)「製紙王」といわれた藤原銀次郎翁が私財を投じて設立された藤原工業大学を昭和 19 年慶応義塾に寄付されたため、我々は「慶応義塾大学藤原記念工学部」に学んだ。この年の電気工学科の同期生は 60 名だった。卒業論文のための研究室はお互い異なってはいたが、共通科目の授業は同じ教室だ。校舎は木造平屋建てで、右は運動場に面していたガラス窓には遮光用の分厚くて重い真っ黒なカーテンが全部の窓に吊るしてあった。

ある授業が始まる前、佐藤が私に「今日も頼むな。」といい、私も了解の合図をした。窓際の前と後に私たちは席を取り、教師がアイウエオ順に出席を読み始める。佐藤自身が出席の返事を終えると、私がカーテンを内側手前に引き寄せる。佐藤はその隙間を利用して窓から外に脱出した。佐藤は背が高かったので、窓から出易かったようで、着地の時ドスンという音がしていた。教師が出席を取り終わると、初めにいた生徒数が少し減っていた。

2)工学部にも合唱部があり、昼休み時間などに練習をした。電気工学科には女子学生がいなかったが、他科の女子が加わっていた合唱部は学部内でも人気があった。

三多摩大学音楽連盟という組織があり、11校が加盟していて幹事大学を輪番制で担当していた。昭和33年秋の第13回音楽祭は慶応義塾が幹事校だったので、佐藤と私とが世話役として国際基督教大学構内の記念館で、課題曲「お江戸日本橋」を盛り込み佐藤敏直編曲・指揮で私達は演奏した。二人で企画した黒表紙のプログラムは今は懐かしい。



その４　お宝のマイ・レコード

手元に45回転EP盤でキング・レコード社製“Custom Record”がある。どんぐりコーラス会にいた藤川琢馬氏の親御さんが同社に委託されたもので、昭和41年9月録音のものである。ラベルには「奉天第一中学校校歌」とあり、内堀維文作詞、鼓城昌平作曲、佐藤敏直編曲でどんぐりコーラス会と印刷されており、私の本物のお宝である。

片面は「奉天浪速高女学校歌」の曲で、入手した頃に近所の女性で満州生活をされた方にお見せして聴いていただいたが、涙を流され、嗚咽されたことのあるしろものだ。

その５　サントリーホールの出演

山形市で演奏されて絶賛を得た佐藤敏直作曲の交響讃歌「やまがた」の東京公演をサントリーホールでやるので、太田手伝ってくれないかという佐藤の依頼がありどんぐりコーラス会の主なメンバーと一緒に参加した。昭和63年8月20日で、14時からゲネプロ、19時本番だ。21時過ぎに演奏が終わり、舞台上の隊列から袖の方に移動しようとしたとき、かなりの緊張と、疲労で少しよろけかけた。前列で歌っていた少年少女合唱団の子供から、「おじさん、大丈夫ですか？」と聞かれたことをなぜか今でも覚えている。でも満足していた。あの時佐藤は来客の挨拶に多忙であって、感想を聞いてみるチャンスはなかった。

その６　プライベートな思い出

「やちよ音楽コンクール・ピアノ部門」の審査会では佐藤は審査委員であった。千葉県下でも名高く権威あるコンクールで、今日でも続いている。平成７年から13年まで彼はこの審査会に参加していた。平成8年12月八千代市勝田台文化センターでその予選会があり、私は労をねぎらうため会場で彼と会った。翌年1月12日に本選会が同所で行われ、関係者との打ち上げ会のあと、私の家に寄ってもらった。酒は少し入ってはいたがくつろいでくれて、つまみの千葉産ピーナッツをポリポリとおいしそうに摘んでくれた。そのときの光景を家内は今でも話題にする。私の家は船橋市で審査会場からは近くだったが、あとにも先にも最初で最後の彼の来宅であった。まことに懐かしい思い出の一つだ。

＜終わりに＞

どんぐりコーラス会や個人的なことに関する佐藤からの古い手紙は、開封した後は殆ど手をつけていない状態で保管している。万年筆で達筆な書体の年賀状が懐かしい。佐藤との思い出のお宝は、それらの中にまだまだありそうだ。しかし、時間の制約もあるので、今回のお宝探しをひとまず終わりとしたい。多謝！多謝！

どんぐりコーラス会について

どんぐりコーラス会は、1958年７月、早稲田大学学生が中心となって創設。創設後間もなく佐藤敏直先生を指揮者に迎え、東京都港区のみなと幼稚園を拠点に、佐藤作品を中心とした混声合唱を楽しむ会として、作曲者自らの指導のもと約40年間自由奔放な雰囲気で唱い続けられた。時には書き下ろしで小作品を歌ってきたこの会は、作曲家佐藤敏直にとってある意味合唱作品への創作意欲を駆り立てる愛着あるこどものような、家族のような、仲間のような存在でもあった。

会は2000年頃に自然解散したが、メンバーは日本各地で各種合唱団に所属し、今なお歌い続けている。昨秋、久しぶりに佐藤先生を偲ぶ同窓会が開催された。

『夕日』

原口 武彦（元どんぐりコーラス会団員）

「・・・あの夕日のなかへかえっていくようだ」—赴任先の新潟で佐藤敏直氏急逝の訃報に接し、取るものもとりあえず通夜の席に向かう新幹線の車中、なぜかこの「夕日」（大関松三郎作詞・佐藤敏直作曲　混声合唱組曲『山芋』）のこの一節が心に浮かんできて、日本海に沈む美しい夕日の情景を思い出しながら、私はデッキにでて一人何度も繰り返し口ずさんでいました。昔の楽譜を開いてみると、この一節、あまり「ネバルナ」とボールペンで注意書きがしてあります。おそらく私たちがあの美しい旋律に自己陶酔して歌ってしまうことを佐藤先生は私たちに戒めたのでしょう。

1959年春、創立一年たらずの私たちの「どんぐりコーラス」に佐藤氏は新しい指揮者として登場しました。当時まだ慶応大学工学部の学生さんだった彼はコロンボ刑事みたいなレインコート姿で私たちの練習場に姿を現わしました。眼光は鋭く話し相手から決して目をそらすことなく、その似顔絵を描くのには曲線は必要がないすべてが直線で構成されているような顔立ちの青年でした。

「ビンチョクさん」（私たちは面と向かっては「先生」と呼んでいましたが、団員の間ではなぜか名前を音読みしてこのように呼んでいました）にとって「どんぐりコーラス」とは何であったのでしょう。「どんぐり誕生三周年記念文集」で氏は次のような苦言を呈しています。

「率直に言って、今のどんぐりは一年前までに見られたあのガムシャラな鼻息の荒さがない。・・・例えば練習にしても当時やぼったくあったが、それなりにもっと鳴る「音」が大きかった。私を引きつけたどんぐりの魅力をあげるなら、まずこのことであったろう。それはエレガントではない。どこから集まってきたのかわからない底力。しかも粗粗しい衝動の塊だった。しかし当時、技術を身につけてこのほとばしり出るエネルギーを何とかものにしてみようという願いが今、全く逆になっていることに気づく時、私には何かしら淋しさと不安が感じられてならない。」

それでも20年何とか持ちこたえ、1978年、どんぐりコーラスが創立二〇周年記念として「佐藤敏直作品の夕べ」を催すまでになったとき、氏はプログラムの「ごあいさつ」で記しました。

「素人合唱団の中でも最も素人くさく、20年つづいたとはとうてい思えない拙い技術に付き合えたことも、今日の私の、ある誇りである。」

「20年つづいたとはとうてい思えない拙い技術」の持ち主の一人であった私に今蘇ってくる練習風景の一つ練習会場であった幼稚園の小さな講堂で大の大人である私たち男女が隊列をつくって行進しながら歌わせられたことがありました。おぼえの悪い私たちにリズムを体得させるためでした。また私の永年勤続（？）の労に報いようとされたのでしょう。ビンチョクさんは私をソロに抜擢してくれました。ソロといっても歌唱力がないことを自他共に認めていた私のこと，歌の一節を一人で朗々と歌い上げるというのではなく、それは「ハッ」でした。日本民謡のなかで発する「ハッ」という掛け声でした。それでも私はこの抜擢にこたえて間をはずさないように懸命に練習したものでしたで。おかげで、その後、私は宴会を閉じる際によく行われる一本締め(正確には一丁締めというそうですが)の掛け声の名手になりました。

ビンチョクさんもどんぐりコーラスも今はもう「あの夕日のなかへかえって」しまいました。



びんちょくごろく
敏直語録

No. 6

作曲作品ではなく、「佐藤敏直の文章のファンだった」という人は意外に多い。

先生の言葉には不思議な魅力がある。どの文章からも、厳しさと強さを支える深い優しさをみるように思う。ファンだったという誰もが、先生のそのとてつもない優しさに触れたくて、文章を何度も読んでは心に言葉をそっと置いて、大切にしまっているに違いない。

敏直語録では、佐藤敏直の「ことば」のきれはしや、鋭い「独り言」、また「散文」や「随筆」、音楽や教育への提言、編集長として毎月書かれていた「編集後記」等々、毎号少しずつ紹介いたします。

今回は、「どんぐりコーラス会」演奏会プログラムに書かれた文章を取り上げてみました。

私の作品とどんぐり

今日聴いていただく作品は、私の合唱作品のほぼ3分の1に当たります。そして、このうち、「青い花」「ゆふがた」「月」「こども」「旅の途の風に」を除くと、すべてどんぐりのために必要に応じて書きおろした作品ということになります。

棒ふりとして知りつくしているどんぐりの素質と技術的可能性、これらが、書きおろす際に与えた影響は少なくはなかったと思いますが、必ずしも妥協の産物ではない、とも確信しています。

私の考えてきたことは「自分の作品として自分の中に位置づける」、「彼等の表現意欲をどこまで沸き立たせることができるか」の二点でした。つまりこのことは、その両者が一致することもある反面、時によっては対立する要素でもあることを意味するわけで、今日の作品達を見渡すとき、曲のスタイルという一点で、少なからずぎくしゃくしているという事実は隠すべくもありません。

しかしながら、成功しているかどうかは別として、とにもかくにも、何かに心を動かされる、という極めて平凡な「人間の求め」を真剣に考え続けてきたつもりです。やゝもすればレトリックに溺れ過ぎたり、またあるときは飾ることを嫌いすぎて、表現する手掛かりさえも削ってしまったこともありましたが、このアマチュア合唱団がその人間的な息づかいを吸収させてくれることにいつも信頼をおくことができてきた、ということは爽快なことでした。

さてそんなわけで、今日はこれらの思いを込めて、若い頃から年代を追ってプログラムを組むことになりました。

棒を振る私と作曲者の私の矛盾をごらんになるのも一興かと思いますが、この小さな合唱団が絶えることなく今日まで続いてきたことの意味を感じて下さるならばこれ以上の倖わせはありません。

（1983年7月23日　どんぐりコーラス会25周年記念演奏会プログラムより）

＜緊急募集！！＞ ～2010年からの3カ年計画にあたって～

敏直語録募集！

★ 出版物発行のために敏直語録の材料を集めます。

お手元に、「佐藤先生のこんな文章があります！」という方は、事務局までお送りください。

メールでもコピーのFAXでも形態はなんでも構いません。

編集人募集！

★ 出版物発行のために編集人を募集します。

多くの敏直語録の種分けや、敏直関連記事からの言葉の選別をはじめ、出版物発行までの編集作業をお手伝いくださる方がありましたら、ぜひご協力ください。

経験ありの方、大歓迎です！

スタッフからの一言メッセージ！

「オレは芸術家としては毛が3本足りない・・」とか、「敏直じゃなくて敏曲だったらよかったんだ・・」とか、「真っ直ぐすぎてつまらない、もっと曲がってどこか完全に抜けていないとダメなんだよ」などとよく口にしていた先生のつぶやきを、元どんぐりコーラス原口さんの表現で思い出した。「～その似顔絵を描くのに曲線は必要がないすべてが直線で構成されているような顔立ち～」。佐藤先生は狂人的な芸術家たらんことを自身に求めて憧れていらっしゃるところがあったけれど、真っ直ぐに現実を見抜く鋭い眼力と、スッと伸びた容姿のままでは、「敏曲」などと名乗りようはなかったのですよね・・・。

3カ年計画の出版物に、"敏直の敏曲への憧れ"のような世界もあぶり出せたらなあ、、、と思っています。

大谷 惠美

音の杜があと3年で活動を休止するというのもちょっと残念ですが、来年からはホームページの方を充実させ、活動休止後もネット上で会員の情報交換ができるようにしたいと思います。

コンセプトは『リアルタイムに情報を発信できる会報』です。何事もポジティブ思考で行きましょう。

山澤 昭彦

今年もあとわずか。景気後退で世の中が暗く感じられ、気持ちが沈みがちになる中で、あれよあれよと言う間に師走です。

音の杜のお仕事をお手伝いさせて頂いていく中で、スタッフ皆の敏直先生への熱い想い、尊敬の念と存在の大きさが伝わってきます。

この熱意と皆様のご支援のお陰で「音の杜」があるのだと深く感じ、身が引き締まる思いです。

来年も宜しくお願い致します。

宮嶋 良子

敏直先生がご指導されていた元どんぐりコーラス会の皆様の原稿から、真摯な熱い想いが今も脈々と続いていることを知りました。

会報に寄せられた敏直語録や多方面の方々の文章を読ませていただく度に、私の知らないことが根雪となって重ねられてゆき、ほっこりしています。

条谷 慶江

どの作曲家においてもそうなのでしょうが、佐藤先生の生み出した作品というものは、その小さなものから大きなものまで、その時先生の中に確かにあるものが湧き上がったものであると思いますと、それらは先生そのものであり、歴史であり、スペシャルであり、音の杜にとってプレシャスなものであるとの思いを今回強くしました。

瀧澤 かおり

● 音の杜 ～佐藤敏直プロジェクト～ 会報誌 Vol. 8 2009年12月23日発行
● スタッフ：大谷惠美（代表）／条谷慶江／瀧澤かおり／宮嶋良子／山澤昭彦／
● 〒101-0065 東京都千代田区西神田2-4-1 （財）東方学会41号室 tel. 03-3239-1906 fax. 03-3239-1907
e-mail：otonomori@otonomori.com http://www.otonomori.com